



「二条河原の落書」に倣えば、此頃かつての自由の国ニハヤル物、関税、離脱、削減閉鎖、追加課税の応酬や国際秩序の枠組みから脱退するような、自分にはやや遠いレベルの問題のようにも思っていた。しかし、語学学習材料としていつも楽しみにしていた政府系ニュースメディアのプログラムが、活動停止命令によって突然更新されなくなり、急に身近なところにその国の変化を感じ取ることとなった。知るほどに深刻なのは、やはり「反 DEI」の動きである。

Diversity (多様), Equity (公平), Inclusion (包摂) を推進し、皆が互いに相手の特徴を等しく認め合う、寛容で開かれた社会づくりが進められてきたが、180 度の方針転換を強いられている。そうしたなか、連邦政府の文書から次々と削除されている言葉があるとの報道。「メンタルヘルス」や「障害」などが含まれ、他には「偏見」「差別」「マイノリティ」、さらには「気候危機」も消え、「LGBTQ」は「LGB」に修正されているとのことである。精神医療従事者が日々携わり触れている言葉ばかりではないか。私たちは DEI を担い、そして担うべき存在なのだと、改めて認識させられる。

こうした大きなうねりのなかで、私が預かる組織 (医局) の運営指針として、以下を掲げている。1. Inclusion (包摂), 2. Diversity (多様), 3. Openness (開放), 4. Equity (公平), 5. Selflessness (無私)。DEI に加えて、何事も閉じて澁むことがないように (Openness)、そして私心なく利他 (Selflessness) を心がける。それは、人が踏み行うべき道は天から与えられた道理であるという、尊敬する西郷隆盛の「敬天愛人」の精神の体現にもつながる。

これらの頭文字を並べると「IDOES」となる。「I do」ではなく「I does」であることで、既存の概念にとらわれない柔軟性を保ち続けることや、理想を追いながらも堅苦し過ぎず遊び心も忘れない、さらには、三人称客観視点から自らを俯瞰的に顧みるという意味合いも込めている。精神科医でもある作家の帯木蓬生さんが、その著書のなかで紹

介されている「人の病の最良の薬は人である」とのセネガルに伝わる言葉を、医局のホームページの表紙にも掲げ大切にしてきた。「IDOES」を心がけ、自らが「人ぐすり」となれるように、一つひとつを丁寧に考え実践していきたい。

ところで、考えることを続け深めていくのは、自らを磨くとともに、日々の問題の解決にも欠かせない作業であるが、人工知能 (AI) が人に代わって考え回答するような状況を最近よく耳にする。悩み事を AI に相談するというのは、少し前まではある種の笑い話であった。しかし、先日診察のなかで実際にそのような話を聞いたが、AI のコメントの適切さと充実した内容に心底驚いてしまった。おまけに、同じ内容を人に言われるよりもずっと素直に受け容れられるとのこと。AI では置き換えられない仕事としてよく精神科医が挙げられるが、あながちそうもいえないと思わされた。ここまでくれば、拒絶するのではなく有効活用を考えるべきだろうと、どちらかというハイテク嫌いの私が素直にそう思わされた。

今後、「私」の思考を AI がする「I thinks」とも言うべき状況は確実に増えていくだろう。それではどのように付き合っていけばよいのか。ヘレン・ケラーは「私は大学でたくさんのことを学んだが、そのあとたくさん、学びほぐさねばならなかった」と語った。学びほぐし (unlearn) とは、今まで学んできた知識や価値観を手放し新しく学び直すことを指すが、彼女は「型通りのセーターを編み、一旦ほどいて自分の体に合わせて編み直す」というイメージをもっていたようである。情報を集めてくるだけでなく、決定や判断をも提示する AI に対して、それに合わせるのではなく自分に合わせ直すことを忘れなければ、人それぞれに意義ある「I thinks」になるだろう。その際に、「IDOES」の心構えを予めしっかり身に付けておくのが大切だと考える。

根本隆洋